Japanese Association of Educational Psychology

J. COSS について

中川　佳子

J. COSS とは，日本女子大学式日本語版統語と意味の理解テスト（Japanese Test for Comprehesion of Syntax and Semantics : JWU）である。このテストは，言語発達遅滞児を発見できるだけでなく，発達性失語や失読において困難を示す領域を評価することができるよう開発したものである。英語版文法理解テストならびにそのフランス語版テストに準拠しているが，格助詞や数詞など日本語独自の項目や問題を組み込んでいる。絵による選択肢を用いることによって，指差しだけで解答できるため，障害児や高齢者にも適用しやすい。20項目80問題から構成されており，15～40分程度で実施することができる。誤反応分析によって，文理解の誤りがどのようなところにあるのかを分析することができるのも特徴の一つである。第3版は3歳児から適用できるが，妥当性に関しては語の獲得についての一般的な知見とも合致した結果が得られており，また信頼性係数も.91と高い。

広汎性発達障害児の場合，文法理解の発達が遅れるが，特に授受関係の理解の遅れが共通している。これらの子どもに対して6ヵ月間にわたる個別支援を行ったところ，理解力の向上が見られ，その効果は日常生活場面においても確認された。また，高齢者を対象にした分析では，認知症スクリーニング・テストとの間に高い相関関係が認められ，この方面への応用も期待できる。

LC スケール（言語・コミュニケーション発達スケール）の開発と適用

大伴　潔

LC(Language/Communication)スケールは，言語・コミュニケーション能力を総合的，包括的に評価することを目的とした検査である。0～6歳児レベルの全64課題から構成されており，語彙，語連鎖（文法），談話・語操作，音韻意識の課題が用意されている。

これらの課題を用いて，言語理解，言語表出，コミュニケーションの3領域について，LC 年齢，LC 指数を算出できるようにしており，個人内の発達的バランスがプロフィールとして表示できる。LC 年齢の算出に際しては，何問中何問の正解かを独自に得点化する方式を採用している。検査の実施に際しては，それぞれの課題が一種の年齢尺度として位置づけられているので，それぞれの発達水準を代表する手ごたえ課題（サンプリング課題）を実施し，それらの結果に基づいて必要な課題を与えていくという方法をとっており，子どもへの負担の軽減が図られている。

本スケールは，ビネー式知能検査結果との高い相関関係が認められたが，絵画語彙検査との間には相関関係が認められなかった。障害児へ本スケールを適用したところ，知的障害児は文復唱が困難で，短期記憶の問題が示唆された。広汎性発達障害児は3領域のすべてが低いわけでなく，個人内差が大きいのが特徴であった。今後，こうした個人内差と臨床像との関連を探り，本スケールの結果を利用して指導領域をどのように設定するか，指導プログラムの開発にどのように結び付けていくか，といったことが検討課題となる。

指定討論 1

小林　春美

日本語獲得の発達を評価できる多様な検査が開発されたことの意義は大きい。発表された四種の検査は，対象年齢，評価領域，実施方法等においてそれぞれ特徴を備えており，これらを組み合わせて実施することによって，臨床実践の面における活用が期待できる。そのためにも，手軽に実施できるようネット上で配信していく，材料や記録用紙を自作できるものを開発するといった配慮が必要であろう。

他方，言語発達に関する研究成果にも注目する必要がある。言語の問題は，心理学のみならず，認知科学，情報科学，脳科学等，広い分野で取り扱われている。その意味で，これらの研究成果を広く発信し，言語研究が学際的に取り組まれるよう期待する。

指定討論 2

林　安紀子

言語発達の評価という場合，その評価が研究に裏付けられたものであること，支援に結びつくものであること，という視点が必要である。評価は，子どもの現状を理解するためのものであるが，同時に子どもの困っている問題を周囲が理解するためのものでもある。そのためには，個人間差だけでなく個人内差に注目しなければならないし，発達の特性（例えばU字型発達）もふまえた評価でなければならない。また，遊びの体験や周囲の声かけの様子等の，言語発達を支える背景要因にも目を向け，全体的な発達の中で評価が行われる必要がある。

NII-Electronic Library Service